

中村俊亀智 民博名誉教授を偲ぶ

二〇一二年一月二日ご逝去 享年八十一歳

近藤 雅樹 民博民族文化研究部

中村俊亀智というよりは「中村たかを」といったほうが広くその名を知られているのかもしれない。民具の研究や調査の際に参考とされた一冊の本があった。『現代のエスプリ 民具』（至文堂、一九七四年）である。その編集を担当し、解説されたのが民博の「中村たかを」氏だった。民博の礎でもあるアチックミュージアムの伝統を受け継いで民具というものの説明をし、かつて日本人がどのような物質文化を身につけていたかということを知りやすく解かれている。伝統的な民具研究の入門書としてその価値は高い。

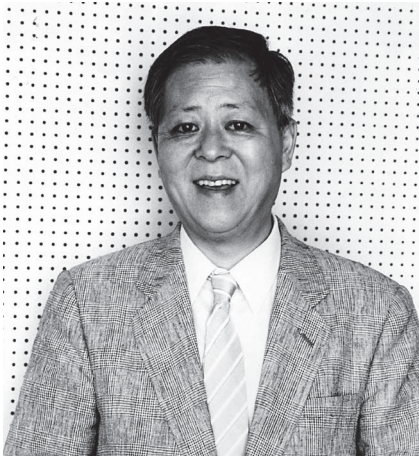
じつは、わたしは中村氏が去られたあと民具研究（担当）のために民博にやってきた。しかし、中村氏との面識はない。ひよっとすると現在の民具研究者の多くも、ほとんど面識はなかったのではないか。

中村氏の民具研究では、学史を整理した業績とともに竹細工の研究が印象に残っている。民博を退官される直前には、労働者の研究もあり、これは大部の調査報告書として刊行された。し

かし、民博を去られてからの中村氏の関心は急速に民具研究から離れていってしまったようである。その後、民具に関する寸評や資料紹介などもなさろうとしなかったためか、民具研究者のあいだでも若い人たちにとっては伝説めいた存在に映るかもしれない。

保谷（西東京市）にあった財団法人民族学協会附属民族学博物館に移転されたアチックミュージアムの民具資料コレクションとその後、の収集資料は、昭和三十七年にこの博物館の閉鎖により、国に寄贈されて戸越（品川区）の文部省史料館に移された。

高校生だった当時から、中村氏は保谷の博物館で資料整理のアルバイトをしていたという。その後、都立大学大学院社会科学研究所を修了すると、昭和三年に財団法人民族学協会研究員となり、博物館に戻ってきた。そして、約五年間の勤務を経て民族学協会を退職すると、翌日からは文部事務官として史料館に奉職された。やがて、このコレクションは国立民族学博物館が所蔵するところとなり、昭和四八年から



中村俊亀智名誉教授
（『月刊みんぱく』1987年9月号より）

祖父江孝男 民博名誉教授を偲ぶ

二〇一二年二月二十五日ご逝去 享年八十六歳

中牧 弘充 吹田市立博物館長

祖父江孝男先生の訃報を知ったのは暮れの小雪交じりの北京だった。ちくま文庫版の『県民性の人間学』（二〇一二年）が上梓されて間もなくのことで、その急逝に驚いた。八六歳になお健筆をふるわれていたからである。

祖父江先生は一般には県民性の研究で知られ、文化人類学の入門書にも定評があった。アメリカに留学中、当時一世を風靡していた「文化とパーソナリティ」の理論を咀嚼し、それを日本社会に適用したバイオニアでもあった。またアラスカ・エスキモ어의研究に先鞭をつけたことでも功績がある。

新潮文庫版の『県民性の人間学』（二〇〇〇年）の表紙には「文化人類学の泰斗」という形容が肩書についている。明治大学で岡正雄、蒲生正男らとともに後進を育て、国立民族学博物館に転じてからはその創設に尽力し、梅棹忠夫初代館長の片腕として大車輪の活躍をした。とくに研究部会議での議長役は見事だった。また日本民族学会の会長を二回もつとめるなど、まさに泰斗にふさわしい存在であった。

民博では一〇年にわたる特別研究「現代日本文化における伝統と変容」の初代担当部長として、また一九八四年に放送大学に移られてから

は討論参加者として、つねに議論に加わっていた。梅棹館長は別格として、米山俊直先生とともに東西の重鎮の役割をはたしていたといえる。わたしが実行委員長るとき、現代の「神話」をテーマに取り上げたいと言ったら、東京からの電話でその成否を親身になって心配してくれた。民博の展示では、アメリカと東アジアが常設展示の担当であり、「朝鮮半島の文化」におちついた名称をめぐって頭を悩ましていた。また外国語表記をめぐることは、梅棹館長と異なる意見を持ち、論陣を張った。簡単に言えば、梅棹館長が英語は国際共通語ではないと原理原則に立脚したのに対し、祖父江部長は英語のはたす実質的機能を重視していた。そして、梅棹館長時代にはその原理がならぬかれ、ポスト梅棹時代になると次第に英語の機能が増していった。

先生の「人間性」にも言及しておきたい。生まれは東京下町であるが、吉原に近い浅草出身だったため、山の手や県外の同級生たちから蔑視されるという苦い経験をもつ。それが文化のちがいに目覚めるきっかけとなり、文化人類学への道につながった。ただし、下町特有のべらんめえ口調は聞いたことがなく、洗練された庶民性を身につけておられた。一九九三年に紫綬

褒章を授与されたとき、民博関係者による祝賀会がひらかれた。挨拶に立った先生は受章式用にモーニングを調達したまではよかったが、サスペンダーがなくて困ったと、あわてぶりの顛末を飾り気なく面白おかしく語っておられた。開館当初おこなわれた研究部事務の女性職員による人気投票では、先生がトップだったそうである。ささの祝賀会ときも「昔と変わらず若々しくダンディな祖父江先生」（私信）と慕われていた。いつまでもダンディのまま、安らかにお眠りください。



梅棹忠夫民博初代館長（右）と談笑する
祖父江孝男名誉教授（左）